



建築、アートが融合するホテルプロジェクト

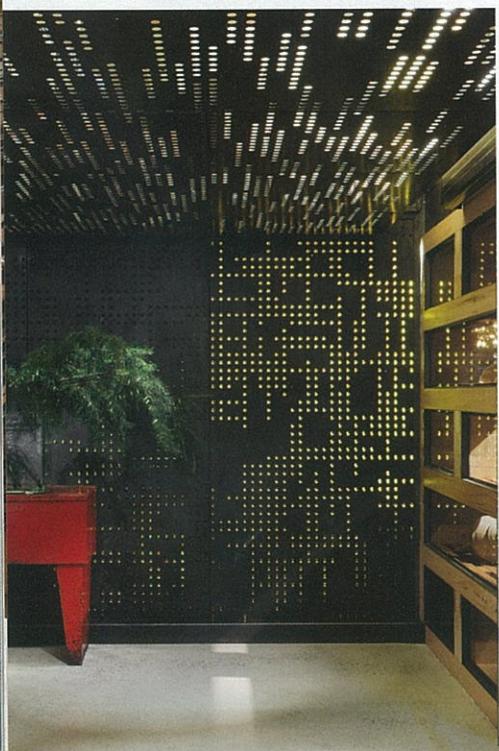
New Acton Nishi HOTEL HOTEL

New Acton Nishi HOTEL HOTEL, Australia
Designer Fender Katsalidis Architects SUPPOSE DESIGN OFFICE
Molonglo Group Don Cameron March Studio Ken Neale
Craig Tan Architects Broached Commissions

設計／建築 Fender Katsalidis Architects 建築・内装 サボーズデザインオフィス
内装 Molonglo Group Don Cameron March Studio Ken Neale
Craig Tan Architects Broached Commissions
設計協力／環境・設備設計 Arup ランドスケープ・外構デザイン Oculus
施工／PLY Nikias Diamond Molonglo Group
撮影／Tom Roe

左／「ホテルホタル」地上階のホワイエ。古材を吊るしたインスタレーション的空間
が宿泊客を迎える 右／使用される古材は、オーストラリア国内から集められたもの





• growing architecture

2008年、オーストラリアの不動産開発企業・Molonglo Group(モロングログループ)により、日本の建築家が数人選出され、面接によって我々が今回のプロジェクトに関わることになった。面接時、最も強く伝えた内容は、私たちの事務所は非常に柔軟な考え方を持っており、プロジェクトごとにクリエイントやエンジニア、ランドスケープアーキテクト、デザイナーなどと、化学反応を起こしながら、プロジェクトを進行しているため、アウトプットは毎回違うべきで

あるということであった。つまりそれは、場所や環境によって建築のあり方を問う行為であり、一見すると作家性がないかのように見えるかもしれないが、多様であるということが作家性になりうるということでもある、という考えを彼らに伝えた。

オーストラリア・キャンベラでの本プロジェクトは集合住宅・オフィス・ホテル・飲食店などを併設させたコンプレックスビルディングの計画である。太陽があたかも西から昇っているかのように錯覚してしまう南半球では文化が違うことは言うまでもないが、建設における施工精度

や考え方も大きく違い、その基本的な考え方を吸収するとところから計画が始まった。湖に隣接した敷地において最大限に光や風を享受できる形態を求め、エンジニアチームと議論しながら最小限の操作による非常にシンプルなデザインの中にある、新しさを見つけることが求められた。型枠製作の簡易性によってコストコントロールを、外壁面の出入りによって光の調整を行い、その機能の結果として現れる形態が、この場所におけるシンボルになる状態をつくり出した。

あれから8年が経過し、社会は以前よりも一層

多様化した現在があるが、このプロジェクトで考えたこと、シンプルな新しさは決して古びることなく、また内部機能が設計過程の中で大きく変動したにも関わらず、あの時に考えた事が実現された。それは変化を受け入れるという前提から、設計をしていくことで、完成させるというゴールを目指すのではなく、むしろ育っていく建築の姿がそこには存在している。私たちは日々、未完成という完成、つまりは growing architecture を模索し続けている。

（谷尻 誠／サポーズデザインオフィス）

上／ホテル1階のライブラリースペース 下左／レストランエントランス前の共用部。天井や壁面に穴を開けLEDで内照させている 下右／ラウンジスペースの一画にはカラーサンドを用いたアート作品。施設内のいたるところにアート作品が展示されている 右／地下階のダイニングフロア。RCの角柱を積み上げたカウンター越しに調理の様子が見える



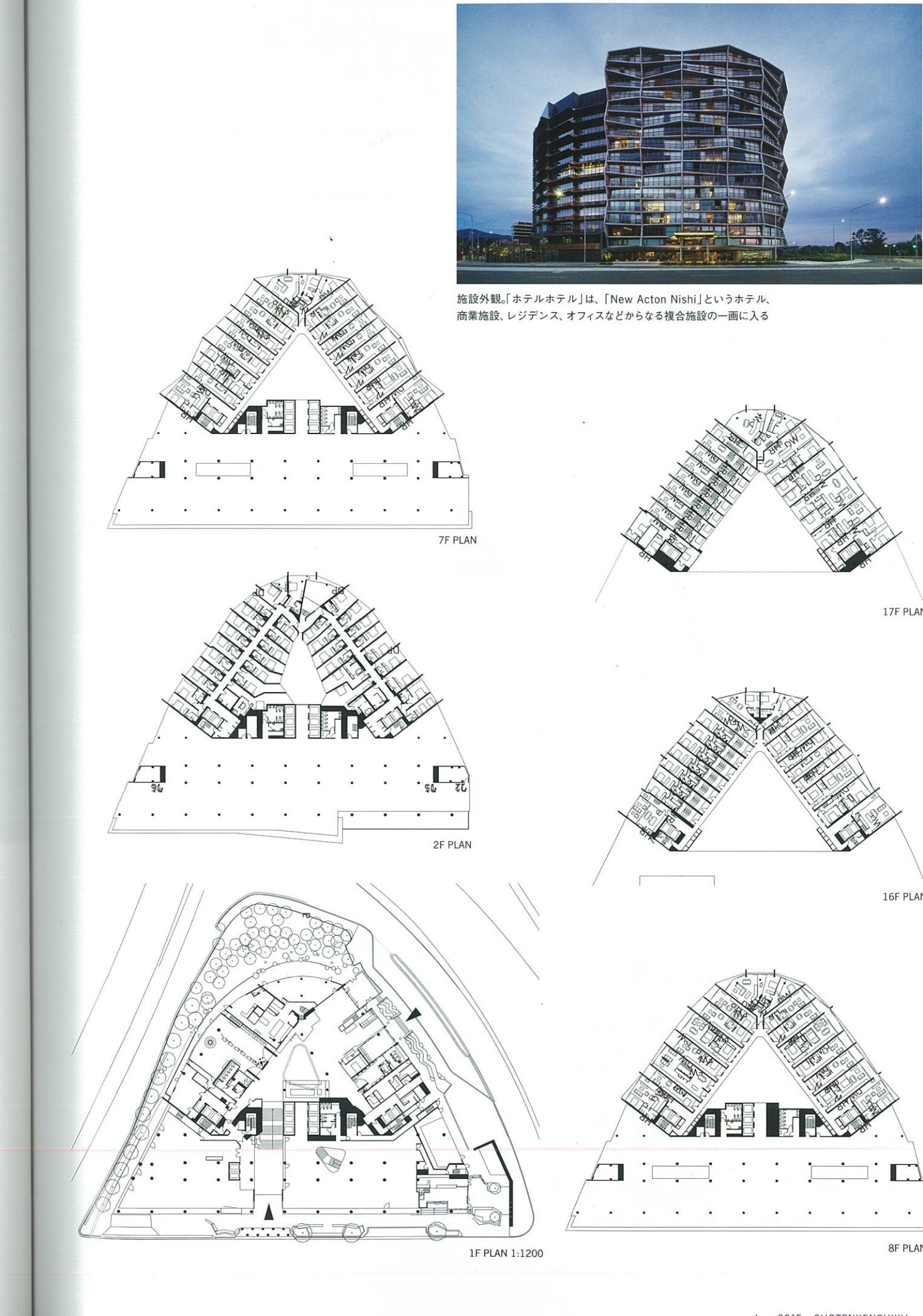
上／客室。RCスケルトンの空間に、OSBやテラコッタなどの質感ある素材を使用 下左／照明器具や家具など、室内のほとんどのプロダクトはオリジナル 下右／RC製の浴槽を採用した客室バスルーム。この浴槽もアーティストによる作品

「ニューアクションシティ・ホテル」data

所在地: 25 Edinburgh Ave Canberra ACT 2601, Australia
工事種別: 新築
構造と規模: RC造 PRC造 オフィス棟10階建て 住居棟13階建て ホテル・商業棟4階建て
敷地面積: 3800 m² 建築面積: 3800 m²
延べ床面積: 5万6500 m² (地下駐車場を除く) / アパートメント1万4600 m² ホテル2000 m² 商業施設4000 m² オフィス2万500 m²
工期: 2010年8月～2012年12月(オフィス棟) ～2013年11月(ホテル・商業棟) ～2014年3月(住居棟)

営業内容

主な仕上げ材料



施設外観。「ホテルホテル」は、「New Acton Nishi」というホテル、商業施設、レジデンス、オフィスなどからなる複合施設の一画に入る

混沌を許容する 「非線形的」なプロジェクト

「ホテルホテル」プロジェクトには建築家だけでなく、数多くのアーティストも参加している。スタートから7年以上掛けて完了したプロジェクトについて、ホテルホテルのファウンダーであり、プロジェクトを指揮したNectar Efkaridis氏に聞いた。

取材・文／高橋正明 ポートレート撮影／神宮巨樹



Nectar Efkaridis氏

—まずは、今回のホテルのコンセプトと開発の経緯についてお話くださいますか。このホテルのコンセプトは、1940年から90年にオーストラリアにやって来て、その歴史にも影響を与えたヨーロッパ移民の物語です。こうしたテーマは、あまりないものですし、きっちり固め過ぎずに、どういう方法で表現するかを協力者全員で話し合いながら進めました。ホテル客室の内装は、映画監督など全く異分野の人々が参加し、新しい視点を入れました。結果、ヨーロッパやアメリカのブティックホテルとは全く違うものになり、そこにオーストラリアの伝統的な住居である「シャック(素朴な小屋)」のイメージを取り入れています。

—サポートデザインオフィスの谷尻誠さんがそのチームに入った訳ですが、一緒に仕事をしていかがでした。

以前から日本式の生活、デザイン、クラフトやメーカーの考え方方に非常に関心があり、そういうものを取り入れたいという考えがありました。西洋の建築家は大きなスペースの設計が得意で、我々が求めていたのは、逆に小さな空間をうまく処理できる建築家でした。重要なのは、モニュ

メンタルな建築物だけでなく、親密さのある空間です。オーストラリアの設計事務所のフェンダー・カスター・ディス・アーキテクツ(FKA)のディレクターと、アラップがセレクトしてくれた数名の日本の建築家と面談した結果、最も刺激的な提案をしてくれて、親しみの持てる空間のデザインに長けている、谷尻さんに依頼することにしました。広島の事務所にもうかがい、過去の作品を見せてもらい、期待している高度のサスティナビリティーも期待できると思いました。日本語を話せるスタッフをFKAで雇ったりしながら、ディスカッションを進めました。谷尻さんは、現地にもしばらく滞在してもらいましたが、写真を撮ったり、現地調査や見学をしてもらっています。

—建物はどういう構成になっていますか。

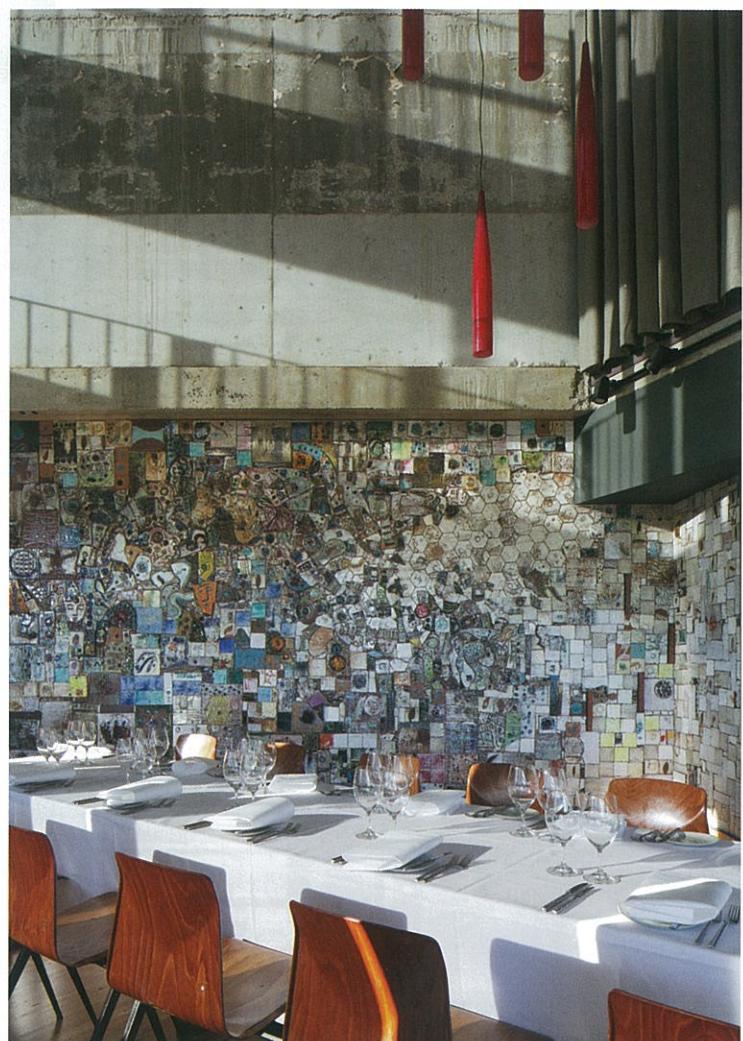
設計のプロセスは相当混沌としたものでしたが、これはあえて私が望んだことでした。面倒なコラボレーションは避けたいと思うのが普通でしょうが、物事をシンプルにしようとすれば効率重視で安直な方に流れてしまいがちです。また、言葉の障壁は、逆にそれが新しい見方を出してもらうきっかけに転じることもあります。「ホテルホテル」が入る「ニシ ニューアクトン」

法規も各様ですが、ミックスすることをあえて目指したので、建設すること自体が大変でした。機能面では、空間の快適性や自然な方を重要視しました。オーストラリアは世界でも有数のサスティナビリティー推進国で、この建物でもソーラーパネルを取り付けています。住居部分には空調は取り付けず、窓を開ける自然換気で足りるように設計されています。その点では非常にチャレンジングな計画で、プライバシー、セキュリティ、アクセス、ノイズの問題をクリアするファサードをつくるのは大変でした。用途、機能、環境が一体的に融合する開発を目指しているのです。

私は「場をつくること」を常に重要視しているので、今回のようにコラボレーションが混沌となつたのも意図通りです。LIFE(生命・生活)とは、まさに混沌です。構築物がすべて工業化されてしまうと、すべてにおいてオートマチックになります。工場から現場まで、「次はこれ」とデジタルで示せるような「線形的な」プロセスを踏むだけのものになりますが、それでは生態やダイナミクスには不向きです。なぜならライフは「非線形的な」ものだからです。今回の計画のプロセスを例えて言うなら「進化生物学的な大きなスープ」とでも言いましょうか。すべての具と一緒にして煮込んでいます。多岐に渡る接点のあるネットワーク=インターネットとも似ていて、多様な人々が参加貢献しつつ、そこにオーサーシップ(代表者、著作者)はありません。関わる人全員がオーサー(著者)とも言えます。逆に、線形的な方法論は、オーサーがいて、その人が決定権を持って統括する世界です。ここは、SNSと同様、一つの物語の元に多様な人々が集まってきました。この開発計画では皆が新しい意見を提示しましたが、ビルのデザインはいずれ、このようなSNS的な方向に向かうことでしょう。その時、ディベロッパーの役割とは、アーキテクトと一緒にアイデアを提供するエージェントであり、またキュレーターのようなものであるべきだと思います。

—大勢のアーティストを起用した理由は何ですか。また、その成果はいかがでしたか。

テーブルでもティッシュボックスでもゴミ箱でも、私が納得できる素材やデザインのものが既製品はないので、作家に頼みました。例えば、ガラスの作家は、このホテルのためにガラス器を制作してくれましたが、それは「このホテルのためにデザインしたというのではなく、結果的にこのホテルにふさわしいものに出来上がった」と言う方が的確なコラボレーションの仕方で、そのようにアーティストに参加して欲しかったのです。ハンガリーから移住した真鍮の作家にはティッシュボックス、テーブル、照明などをつくってもらいました。この他、今回のプロジェクトのためにバースからキャンベラに移住して、工房を立ち上げた鉄の作家には、2年掛けて重



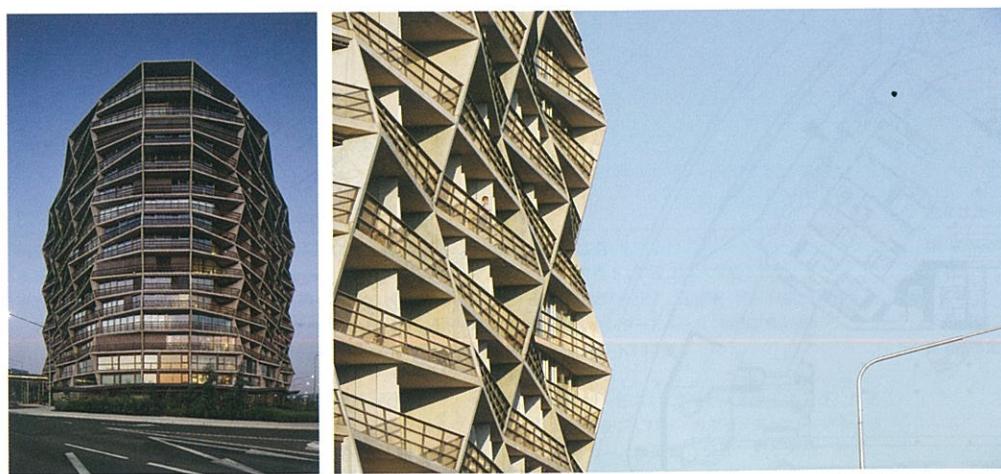
客室のほか、レストランなどの共用部にもアート作品が飾られ、食器、家具なども作家を使用

量500kgのドアや美しいゴミ箱を、ヴィクトリア出身の作家にはコンクリート製の浴槽をつくってもらうなど、オーストラリア全土から優れたアーティストを招きました。

—このプロジェクトのための「アーティスト村」があつてもおかしくないです。

現在メルボルンに、90名前後のアーティスト、ミュージシャン、デザイナー、建築家、ラングドスケープアーキテクトなどが集まる「スクールハウス・スタジオ」という場所をつくっています。このホテルに来て、アーティストの作品に更なる関心を持ってくれた人がそこへ行けば、作品の制作過程をライブで見ることもできます。私たちは、今回のプロジェクトで、内部にあるすべてのものを一からつくることをしました。40~50年代の古い家具の張り生地もオリジナルでつくりました。私自身がクラフトに強い関心があるのです。他の西洋諸国と同様に、オーストラリアでは、クラフトが次第に消えつつあります。今は回復傾向にあるとは言え、大勢としては、すべて大規模化・工業化され、中国の工場で安価に製造するという図式になっています。人々は安価なものを求めますから、自

（了）



左／外観 右／ファサード近影。幾何学的な凹凸パターンが反復する